

「地域おこし協力隊が見つけた」

しらたかの鉄人! 達人!



①深山の天蚕。どこにいるかわかるかな? ②天蚕の貴重な繭。白い繭1個から1,200~1,500m採れるのに対し、天蚕はその半分の600~700mほどしか採れないそう ③深山の天蚕100%で作ったネクタイ。値段は一本? 万円……。肌触りと光沢が全く違います



「天蚕」

須田 信一さん (深山・68歳)

「貴重な天蚕を残していきたい」

皆さんは、蚕といえば白いものを思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、町内深山地区の天蚕圃場にいる蚕は黄緑色の天蚕です。

「天蚕を始めたのは平成元年で、その頃は繭を一個80円で売っていた。でも、それじゃあつまらないから付加価値をつけようかと、生産↓糸取り↓織物までを一貫してやるようになった」と話すのが白鷹天蚕の会の須田会長です。そしてその反物を銀座の着物専門店「銀座もとじ」に販売。「着物に仕立てて買い手がついた」とのこと。

須田会長は「(天蚕は)黄

緑色をしているから葉っぱと見分けがつかなくて大変だけど、慣れると分かるから」と話し、天蚕のいる場所を指さします。その先には、元気いっぱいにクヌギの葉を食べるきれいな天蚕の姿が。

「(天蚕飼育を)昔は各地でやっていたけど、今では福島県の霊山、長野の安曇野、ここ深山など、産地は少なくなつた。その上、自然相手安定性に欠けることもあり、後継者がなかなか見つからないとのこと。それでも「町の天蚕として残していきたい。だから取り組んでいかなければいけない」と話します。

この天蚕、繭を作る前に病気で死ぬこともあり、自然を相手にすることの大変さを知りました。繭4千~5千個で一反つくれるとのことで、それくらい収穫できたときに「がんばったかいがあったなあ」と思うそうです。今年はたくさんさんの繭が採れますように。



地域おこし協力隊
菅野 裕子さん

▼少し時期は遅くなりましたが、今年の夏も紅花が見事に咲き誇りました。毎年町内各地の紅花畑に足を運びますが、年々がその数が増えていることが目に見えてわかります。

▼「咲かせて摘んで(紅(あか)にして)」紅花生産量日本一を誇っている白鷹町ですが、実は紅花の摘み手不足が喫緊の課題となっています。残念ながら、紅花は咲かせただけでは紅(あか)にはなりません。皆さんもご存じのとおり、花に含まれる1%の赤色の色素を抽出しなければならぬので、来年の夏はぜひ紅花摘みにご協力をお願いいたします。皆さんの手で「日本の紅(あか)」をつくっていきましょう。

▼白鷹町を会場に行われたインターハイ女子ソフトボール競技。青春の全てを白球に注ぎ、全力でプレーする彼女たちの姿はとても輝いていて、取材に行っただけでつかみ入ってしまった。おかげで顔や腕が真っ黒です。出場した選手はもちろん、大会運営を支えたスタッフや高校生、地域の皆さん大変お疲れさまでした。(てづか)



編集後記